放送番組センターレポート

BROADCAST LIBRARY Report

2017.4 No.30

（公財）放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110
http://www.bpcj.or.jp/

TOPICS 今号のトピックス

■公開セミナー　第43回名作の舞台裏「三匹のおっさん」
■公開セミナー　制作者に聞く！「大江戸事件帖 美味でそうろう」（BS朝日）
■阪神・淡路大震災の関連番組を視聴する会、開催
■写真展・特別上映会「岩合光昭の世界ネコ歩き」＆放送ライブラリー公開番組の紹介
■平成29年度事業計画・収支予算を決定
■第25回放送番組収集諮問委員会を開催

■公開セミナー　第43回名作の舞台裏「三匹のおっさん」

2月19日、制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催した。今回は、有川浩の原作をドラマ化、ご近所の事件を“三匹のおっさん”が痛快に解決する姿が、幅広い視聴者の支持を得て高視聴率を記録した、『三匹のおっさん』（テレビ東京）を取り上げた。開催日は、第3シリーズの放送期間と重なり、第5話の放送直後であった。

[登壇者]　北大路欣也（出演）　泉谷しげる（出演）
志賀廣太郎（出演）　猪原　達三（監督）
井上　竜太（制作・ホリプロ）
山鹿　達也（制作・テレビ東京）
[司　会]　渡辺　紘史（放送人の会）

「俺たちかぁ？俺たちはなぁ」「三匹のおっさんだよ！」衣裳を着た“三匹のおっさん”による、決め台詞から始まった今回のセミナー。序盤から会場は大いに沸いた。セミナー当日は撮影の真っ最中であり、キヨ役の北大路氏は、現場から会場に駆け付けた。

本作品の第1シリーズは、2014年1～3月に放送された。企画のきっかけについて井上氏は「時代劇を現代版にした原作が、本当に痛快で感動的なものだったので、ぜひにと思い、ドラマ化の権利をもらった。その時に、3匹の1匹はぜひ北大路さんにやって欲しいと思い企画した」と構想の段階から、“1匹目”が既に決まっていたことを明かした。さらに、「北大路さんと刑事ドラマでご一緒した時に、ゲストの泉谷さんと本当に仲良くされていた。その姿を見て、2匹目がいたと思った」と笑顔で続けた。

井上　竜太

その後、井上氏から山鹿氏へこの企画が提案され、ドラマ枠新設のタイミングと重なったこともあり、制作が決まった。難航していた3人目の決定に導いたのは山鹿氏。台本制作中に観た舞台で「しょぼくれたお父さんの役を志賀さんが演じていて、その時ノリさんを見つけたと思った」と“三匹目”との偶然の出会いを語った。

山鹿　達也

こうして役者が揃いスタートした『三匹のおっさん』。結果的に、平均10%を超えるという、テレビ東京のドラマ史上最高視聴率を獲得する作品となった。山鹿氏が「テレビ東京としては事件が起きてしまったということで、喜び方もわからなかった」と当時を振り返った。また、幅広い年代から「続編を見たい」という投書が寄せられた。

志賀　廣太郎

大きな反響を受けて第2・第3シリーズと続くことになるが、猪原氏は、シリーズ化は意外ではなかったという。その理由を、初回視聴率が良かったことは勿論、「ストーリーがしっかりできていて、キャラクターが立っているので、1話目から出来上がった感があった。原作がとても面白く、これはまだまだ十分いけると感じた」と説明した。第2シリーズ開始までに原作の話はほぼ使い尽くしたため、第3シリーズは「民泊詐欺」等の時事問題を織り交ぜながら、脚本家とプロデューサー陣と共同で制作し、原作者にフィードバックしてもらうスタイルをとった。

泉谷　しげる

役作りについて主演の3人は、共通して持つ幼少期の体験を基にしていると語る。北大路氏は「子供の時代に色々なおっさんに会った、様々な出来事も目の当たりにしてきた。その実感の中で、あまり作り事にならず、自然のまま自分自身がその現場に立てるように心がけている」、泉谷氏は「キャラクター的に悩む前に、自分が子供の頃の大人をやればいいんだと感じた」と語った。志賀氏も「役作りはあまり考えてはいなかったが、子供がそのまま大人になった人。何が正しく、何がいけないかを自分の中でしっかり持っている人を演じた」と続けた。また、北大路氏は「チャ

ンバラは楽しい。どこかにまだうぶな心が僕らには残っている。その残っている良いものを引きずり出してもらっている」と子供時代を思い出しつつ、撮影に臨む様子を語った。

北大路 欣也

本作の毎回のお決まりといえば、青い光をバックに歌いながら登場し、悪者を成敗するシーンである。時代劇を想起させるようなこの演出について、猪原氏は「原作者（有川氏）に、この作品は『時代劇です』と言われたので、成敗シーンは別世界にしよう」と考えたと振り返った。成敗するシーンは夜の撮影のため、柔道着姿の多い泉谷氏は「寒い」と漏らしつつ、志賀氏から「（泉谷氏が）おでんなど、筋とは関係ないのにカットとカットの合間のちょっと休んでいる間に丼一杯食べている」と明かされる一幕もあり、会場は笑いに包まれた。

司会の渡辺氏が評したように、このドラマは今や「絶滅危惧種」となってしまった、親子孫三代をしっかり描いた「古き良きホームドラマ」でもある。井上氏は「原作にホームドラマの良さがあった。毎話事件が起こるが、それが三匹や三匹の家族に戻ってくる話にしようとした」と語った。猪原氏も「僕らがテレビを見始めた頃は、ホームドラマの全盛期だった。その後、核家族の様に離ればなれになり、色々なドラマが生まれ始めた時代でも、基本的に変わらないのはホームドラマ。今回の作品は、ホームドラマに時代劇をミックスしたのがミソだった」と幅広い年代に支持されたポイントを指摘した。

猪原 達三

本作を通じ、出演者も自分自身を見つめ直す機会となった。最後は泉谷氏の「俺らが、若い人はこうだと決めつけているのではと思う。案外、若い連中もしっかりした考え方を持っている人もいっぱいいる。我々がもっと受け入れる姿勢を持っていないと上手いことといかない。そういう橋渡しが、何気なくさらっとこういうドラマで出来たら良いと思う」というコメントで締めくくられた。

今回、現在放送中の作品を取り上げたが、出演者が童心に返った表情で、懐かしい話に花を咲かせる場面もあった。心に眠る共通の原体験が、“三匹のおっさん”のチームワークをより一層強くし、良い作品を作り上げるパワーになっていると感じ取れるセミナーであった。

■公開セミナー 制作者に聞く！「大江戸事件帖 美味でそうろう」（BS朝日）

1月28日、公開セミナー「制作者に聞く!」を開催。今回は、2015年12月、BS朝日開局15周年記念番組として2夜にわたり放送された大型時代劇『大江戸事件帖 美味でそうろう』を取り上げた。この作品は、時代劇に美食とミステリーの要素を加えたエンターテインメント性の高い作品として、第42回放送文化基金賞テレビドラマ番組部門の奨励賞を受賞した。セミナーでは、新しい時代劇作りを目指した制作者の思いを伺った。

[登壇者]
濱　龍也（監督）　大石哲也（脚本）
江野夏平（制作・BS朝日）　丸山真哉（制作・東映）
[司　会]　ペリー萩野（コラムニスト・時代劇研究家）

『美味でそうろう』は、5時間という大作だが、小気味よいテンポが長尺を感じさせない。前後編合わせて16箇所、落語家の三遊亭円楽さんの語りや豆講座が入り、江戸の知識を視聴者に提供している。

江野 夏平

報道情報番組出身の江野氏は、時代劇を制作するにあたり「自分が作るのであれば、新しいものを作りたいと思った。テレビというメディアは情報発信に大きな意味がある。5時間のドラマの中に、江戸の文化・風情がどのようなものであったか、例えば、長屋の家賃や武士の給料はいくらだったのかなどの情報をふんだんに挿入したいと思った」と語った。丸山氏は「当初は有名な原作物も考えたが、徐々にオリジナルでも面白いという気持ちになり、それなら江野さんの得意な情報的な事を満載にした時代劇を作ってみようと思った。また、江戸時代の“食”を調べていくと面白い事が多く、これらを活かしたいと思い、徐々に企画内容が固まっていった」と振り返った。

丸山 真哉

時代劇の脚本が初めてであった大石氏は「情報量の多い時代劇を作りたいと言われ、様々な情報を入れるために、たくさんの時代劇を見て研究した。恋愛、サスペンス、お笑いなど、てんこ盛りにしたいという事で自分が起用されたのだと思う。時代劇は初めてだったが、とても楽しく書けた」と懐かしんだ。その脚本により、エンターテインメント性が高く、新しい感性の清々しい作品に仕上がった。

大石 哲也

監督の濱氏も本格的な時代劇は初めて。「情報を入れると

いう時代劇は新鮮だった」と濱氏が振り返ると、江野氏が「ドラマの流れを分断するような語りを入れる事は嫌われるが、濱監督は積極的にやりたいと言ってくれた」と返した。また、丸山氏は「主役の北村一輝さんは、時代劇が世の中から減っている事に対して危機感を持っている。時代劇という日本の映像文化を残していきたいという思いがあり、今回の取り組みに賛同してくれた」と続けた。江野氏は特殊な時代劇という事で「テロップを入れて、この人の年収はいくらと肩に出そうかという事まで話していた」という。この作品には、丸山氏が細かく調べた江戸時代の家賃、年収、物価などの情報が多数取り入れられた。

ここで、まむしの親分役の工藤俊作氏と続編の晋三役で登場する横堀秀樹氏が飛び入り参加した。180cmを超える高身長の工藤氏は「この身長の岡っ引きは居ないだろうと思ったが、居たらどうなるかと考え、泥臭く武骨に演じた」と語ると、横堀氏は、撮影中、主役の北村氏からプロの役者の姿勢を教えられたエピソードを披露した。撮影は真夏。監督の濱氏は「暑さが一番大変だった」と振り返った。この作品が撮影された映画村のオープンセットは地面が全部砂なので照り返しで更に暑いという。作品内で聞こえてくる蝉の声も、撮影中に実際に鳴いている蝉の声が収録されている。

『美味でそうろう』は、前作の好評を受けて、続編が作成された。出来立てのPR映像が会場に流された。続編には、パンも登場する。丸山氏は「パート2を作る事になり、この時代の有名人を調べていた所、ある人がパンを作っていたという事がわかり登場させた」と明かした。

最後に、江野氏が「こだわった語りの部分が、5時間のスペシャルドラマにCMとはまた違うテンポ感を出してくれた。放送文化基金賞をこのチームで取らせて頂いたことは本当にありがたい。自分は、ドラマでもバラエティーでも常にメッセージを入れている。報道や情報番組と違い、それを直接的に言わなくて済む事が良い。今回の作品にも、どの時代も上に立つ人間によって庶民の生活が大きく変わる。特に弱者の生活が大きく変わるということを背景のテーマとして描いている」と締めくくった。

会場からは「久し振りに充実した時代劇に出会えた」「新しい事に取り組まれた事が作品に現れていた」「今迄と違った時代劇を面白く見られた」「続編を楽しみにしている」など、新しい時代劇を堪能した声が数多く寄せられた。

■阪神淡路大震災関連番組上映会

■阪神・淡路大震災の関連番組を視聴する会、開催

1月17と18日の2日間、7階大会議室を会場に「テレビとラジオが伝えた大震災　−放送ライブラリーの番組を視聴する会−」を実施した。

1995年に発生した阪神・淡路大震災。その体験を風化させることないよう、また、防災や減災などについて考えるきっかけになればと、関連番組の上映会を2014年から続けている。4回目の今回は、1995年から2012年までに放送された番組の中から、ラジオ番組1本を含む7本を紹介した。来場者には、放送ライブラリーが公開している震災関連番組の一覧表を配布し、8階視聴ブースでの番組視聴を案内した。

来場者からは、「番組を視聴するほかに、ボランティア経験者など震災の当事者の生の声を聞く機会があるとよかった」、「ドキュメンタリー、ドラマ、ラジオ番組と多彩なプログラムがよかった」、「ラジオの必要性を再認識した」といった感想が寄せられた。

取り上げた番組は次のとおり。「ドキュメンタリー　さよならダックス先生　阪神大震災を体験した教え子たち」(1995年関西テレビ)、「ドラマ特別企画　海に帰る日」(1999年毎日放送)、「阪神・淡路大震災から15年　ラジオが伝えたこと・そして、伝えること」(2010年ラジオ関西)、「阪神・淡路大震災15年　特集ドラマ　その街のこども」(2010年ＮＨＫ大阪)、「震災16年特別番組　忘れないあの日　刻まれた震災」(2011年サンテレビ)、「1.17 3.11 “２つの被災地”　芽生えた絆」(2012年サンテレビ)、「ＮＮＮドキュメント'12　生かされた命　〜阪神・淡路から東日本へ〜」(2012年読売テレビ)。来場者220人。

また、3月7日から10日まで、同じく7階大会議室を会場に東日本大震災をテーマにラジオ２本、テレビ６本の番組を取り上げ、「テレビとラジオが伝えた３・１１　−放送ライブラリーの番組を視聴する会−」を実施した。(詳細は次号掲載予定)

■写真展・特別上映会「岩合光昭の世界ネコ歩き」

12月15日～2月12日、NHK BSプレミアムで好評放送中の「岩合光昭の世界ネコ歩き」の写真展と特別上映会を開催した。番組ファンを始め、多くの方が来場した。会期中の来場者は、24,666名（一日平均536名）。上映会は、NHKの協力により、沖縄、ウルグアイ、ノルウェー、ベルギー、パリの5作品を上映し、述べ5,767名が視聴した。来場者からは、「様々な土地と猫の雰囲気が素敵だった」「番組を見て、毎回癒されている」「上映と写真を一緒に見られて良かった」など、たくさんの感想が寄せられた。12月23日には、岩合光昭氏のギャラリートーク＆サイン会も開催。番組撮影時のエピソードなどが楽しく語られた。セミナー終了後、写真展会場の入口に岩合氏直筆のネコの絵が加えられた。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーでは、テレビ番組15,970本、ラジオ番組4,224本、テレビ・ラジオCMを10,796本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で一般に無料公開している。28年度12月から3月に新たに追加公開した主な番組・CMは以下の通り。

【テレビ番組】

◇『ETV特集　死刑囚　永山則夫　～獄中28年間の対話～』2009年10月11日放送・NHK

◇『山田太一ドラマスペシャル　時は立ちどまらない』2014年2月22日放送・テレビ朝日

◇『TUFルポルタージュ　ふつうの家族　ある障がい者夫婦の22年』2014年6月30日放送・テレビユー福島

◇『人間神様』2014年5月31日放送・長崎放送

これらの番組に加えて、28年度上智大学の授業でメタデータ作成実習を行った10番組も公開した。

【ラジオ番組】

◇『ラジオ深夜便　明日へのことば　サザエさんの声で、45年　加藤みどり』2014年4月8日放送・NHK

◇『SBCラジオスペシャル　受話器の向こうから　026－237－0555』2016年5月29日放送・信越放送

◇『ベッドの上のカメラマン』　2016年5月29日放送・福井エフエム放送

【テレビ・ラジオCM】

第55回ACC CMフェスティバルで入賞した作品約300本。

■平成29年度事業計画・収支予算を決定

2月24日開催の第2回理事会で平成29年度事業計画・収支予算が承認された。事業計画の概要は次の通りである。

［平成29年度事業・財政計画］

平成29年度は「向こう5年間の事業方針」に基づいて事業を実施する最終年度にあたり、これまでの4年間の成果と今後の方向性を見据えて、事業を遂行する。

番組の収集・保存・公開は、公開番組数の増加を図るため、権利処理体制の強化を図る。

事業の全国展開は、各地の公共施設と連携したサテライト・ライブラリーの設置と大学の講義における公開番組の利活用の普及に注力する。

放送文化の振興に寄与する企画展・上映会・公開セミナーは、横浜だけでなく各地で開催し、放送ライブラリー事業の周知に努める。

新たな取り組みとして、これまで年度ごとに収集してきた保存番組の選定に加え、過去に遡ってテーマに沿った体系的な番組収集を行うことや、放送局との番組交換をファイルベースに対応して収集することなどを掲げている。

基本財産の運用は、マイナス金利の情勢のもと、運用利率2%以上を維持して、28年度並みの2億2,500万円の運用収益の確保に努めるとともに、民放とNHKの出捐金は、24年度比30%減の総額1億6,170万円を要請する。

これらの事業を実施するための収支予算は、「経常収益」3億9,660万円、「経常費用」3億8,872万円を計上する。

■第25回放送番組収集諮問委員会開催

3月14日（火）第25回（平成29年度）放送番組収集諮問委員会を開催し、以下4項目について事務局から報告した。

1.番組の収集、保存、公開状況について

2.全国展開のロードマップについて

3.次期5年間・平成30～34年度の事業方針について

4.平成29度事業計画、収支予算について

委員から多くの意見、提言があり、吉見委員長から以下のとおりまとめがあった

◇「収集保存公開番組の充実」

最善の番組ライブラリーがどういう形であるべきであるかを考え、過去の年度に遡って補完的にもう一度収集対象となる番組の洗い出し作業をやっていくことも必要である。

◇「全国展開事業の推進と利活用番組の充実」

公共図書館、県立図書館、大学などで利用されている番組が、いまだ数十本という状況では、公開番組数との差が大き過ぎる。

もっと多く数の番組を利活用してもらえるようにしていくべきである。

◇「広報強化と存在感の周知」

広報と提携先のリサーチを同時にやりながら、放送番組センターの価値を、認知していく形を作っていくということが、喫緊の課題である。